

# 獣医療のミライ 1

インタビューシリーズ



森下啓太郎 北海道大学

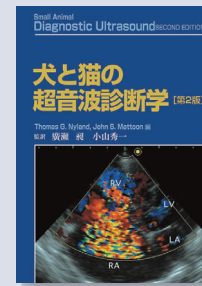
自分の実力を客観視し、  
努力を続ける

## Recommend 森下啓太郎先生が薦める、この4冊



CLINIC NOTE BOOKS  
改訂 臨床家のための  
血液病学アトラス  
—CBC と形態観察からせまる—  
著: 下田哲也 B5版 並製本 216頁

定価: 15,400円(税込)のところ  
キャンペーン価格 13,860円(税込)



Small Animal  
Diagnostic Ultrasound SECOND EDITION  
犬と猫の  
超音波診断学 [第2版]

著者: Thomas G. Nyland (DVM),  
John S. Mattoon (DVM)  
監訳: 廣瀬 昶・小山秀一

定価: 33,000円(税込)のところ  
キャンペーン価格 29,700円(税込)



CLINIC NOTE  
ENTERAL AND  
PARENTERAL NUTRITION

獣医学の“標準診療”を学ぶ総合情報誌  
月刊誌 A4判 96頁

1冊定価: 3,353円(税込)  
定期購読1年(12冊): 33,524円(税込)  
※こちらの商品は10%off対象外です。



VETERINARY  
BOARD 9  
輸血のABCと副反応

獣医学の“標準診療”を学ぶ総合情報誌  
月刊誌 A4判 96頁

定価: 4,400円(税込)のところ  
キャンペーン価格 3,960円(税込)

9号  
(2020年1月号)

### Information

- 森下先生の本インタビューは、Eduward Mediaサイトからもお読みいただけます。詳しくは<https://media.eduone.jp/>にてご確認ください。
- 森下先生からお勧めいただいた書籍が、期間限定にてお安くお買い求めいただけるキャンペーンを実施中(キャンペーンお申込期限:2021年5月末日まで)。詳しくは<https://eduward.online> もしくは専用チラシをご確認ください。

EDUWARD Press

〒194-0022 東京都町田市森野1-27-14 サカヤビル2階  
tel. ☎ 0120-80-1906 fax. ☎ 0120-80-1872 <https://eduward.online>  
DM: 70001775



森下啓太郎  
Keitaro Morishita

北海道大学

### 経歴

- 2006年3月 北海道大学 獣医学部 卒業
- 2006年4月 酪農学園大学附属動物医療センター 内科研修医
- 2008年4月 山陽動物医療センター 勤務医
- 2012年4月 北海道大学大学院獣医学研究科 附属動物病院 助教
- 2017年6月 獣医学博士号取得(北海道大学)
- 2019年10月 アジア獣医内科学(AICVIM)設立専門医

## 自分の実力を客観視し、 努力を続ける

—内科でキャリアを積もうと思われたきっかけは？

大学5年生のときに滝口満喜先生がいる研究室に所属しました。超音波検査の第一人者である滝口先生のもとで自分もエコーができるようになりたいと思ったわけです。先生と出会ってなければ内科でキャリアを積むことはなかったですね。しかし、滝口先生は私が研究室に所属して半年で酪農学園大学へと異動されてしまいました。ですので当初の希望は叶はずもなく、今思えば臨床経験を積むには少し寂しい学生時代でした。

—これまで一番の壁にぶつかったのは、どのようなときでしょうか？

間違いなく、獣医師1年目のときです。学生時代に滝口先生のもとで勉強できなかったのが、就職先として酪農学園大学の内科研修医を希望しました。当時の研修医は新卒になるものではなかったのですが、私の1学年先輩の中村健介先生（現、北海道大学）が新卒として酪農の研修医になっていました。中村先生は当時からデキル男だったので、「新卒を研修医として雇っても戦力になる」という空気がうまれたのでしょうか。おかげで、私も新卒で採用されたわけです。

ところが、実際に研修医になってみると何をやってもうまくいなくて…。学生時代自分なりに勉強してきたつもりでしたが、診察数が多い酪農でもまれている学生と比べても、実力の差は歴然でした。「自分も大学で頑張ってきたはずなのに、なぜこんなにも違うのだろう」と悔しさも味わい、そして中村先生と比べられることもプレッシャーでした。自分が認めてもらえないという感覚は辛いものでしたね。

—その当時、思うようにできない自分とどのように向き合い、乗り越えたのですか？

この辛い状況を打破するにはどうすればいいか、自分なりに考えました。結論は、「すべてを一度に改善することは難しいので、エコーだけはとにかく練習してできるようになろう。そうすれば、少しは認めてもらえるのではないか？」ということでした。当時の滝口内科は、「超音波検査を軸に考える内科診療」というスタイルだったので、エコーが必要十分にできないとついていけなかったんです。診察後や休日には、たくさんエコーの練習を行いました。酪農の学生達はすごく優しく、「できない研修医」だった私を受け入れてくれて、一緒に練習に付き合ってくれました。中村先生も、ああ見えて意外に優しく、私



がプローブをあてていると面倒くさそうに床に座り、見落としがなか見ていてくれました。心強かったです。自分の実力を客観視できたことと、周りの支えがあって、なんとか乗り越えられたんだと思います。

## 一次診療で学んだ “獣医師として当たり前”のこと

—その後のキャリアはどのように築かれたのでしょうか？

研修医生活も1年半が経ったころ、またもや滝口先生が北大に異動してしまいました。追いかけていくという選択肢もあったのですが、二次診療しか経験していない自分はバランスが悪いという自覚があったので、「獣医師として普通のことが普通にできるようになりたい」と思い、山陽動物医療センターに就職しました。下田哲也院長は血液学で有名だったので、「忙しくて病院にはあまりいないのかな？」と思っていたのですが、とんだ誤解でした。耳掃除から手術まですべて自分でできていましたし、誰よりも働く。そしてスタッフをととても大事にしてくれました。とても尊敬できる先生です。居心地がよくて、いつの間にか4年が経過したころ、北大で臨床教員の公募があることを聞きました。私は学位をもっていなかったのですが、教員として働きながら5年以内に学位を取ることを条件に採用してもらいました。

下田先生に師事していたことから、大学では血液内科を担当しました。しかし、誰も私のことなど知らないわけですから、とにかく学会で発表して自分を売り込みました。他大学の先生から、「森下先生はいつも自分で発表しているけど、研修医はいないの？」と聞かれたこともありました。作戦は成功したようですね。少しずつ雑誌や講演の仕事もいただけるようになりました。

—教育についてはどのようにお考えでしょうか？

近年、海外の教育機関を視察する機会をいただいたのですが、そこで実感したのは、学生を教育する目的が、欧米と日本ではかなり違うということです。日本の大学には、“獣医学部の学生をどう獣医師に育てるか”という意識や制度が、あまりないように感じます。一方、欧米の獣医学部はあくまで獣医師を育てることに主眼を置いており、“どう獣医師を育てるか”という目標も非常に明確です。そして、その目的のために先生方は相当な時間と労力を費やし、大変熱心に教育されています。学生もそれに応えて、打てば響くように答えが返ってきます。

2019年、北大と帯広畜産大学の共同獣医学過程は、欧州獣医学教育機関協会（EAEVE）の認証を取得しました。これは、EAEVEが定める獣医師教育へと大学が舵を切ったとも理解できますが、欧州とまったく同じように教育するのがよいかについては、議論があってしかるべきです。日本の獣医大学は臨床系と基礎系の研究室に分かれ、臨床系は「基礎は獣医師なのに臨床ができない」と非難し、基礎系は「臨床は基礎研究ができない」と下に見る傾向が少なからずあるのではないのでしょうか。私が学生のころには、教員にそのような潜在意識があって、それが学生にも伝播していたように思います。しかし、臨床と基礎の優位性を争うなんて馬鹿げていますし、そもそも切り離して考えられるものではないですよね。このような雰囲気は私たちの世代で終わりにして、お互いが得意な分野を認め合い補完できる建設的な関係を目指していきたいと思います。

—最後に、森下先生の今後の目標を教えてください。

自分の専門である血液学は、地味でマニアックというイメージがあるかもしれませんが、教え方ひとつで全然変わるんですよ。その面白さを最大限伝えられるように「誰でもわかる血液学」を実践することが目標のひとつです。また大学教員として、飼い主に寄り添う姿勢を学生に示し、思いやりのある獣医師を育てることは、私だけでなく北大の全臨床教員に共通する使命だと思っています。